国語　実践事例１

学び合いの中で言葉をつなぎながら作品世界を読み深める子ども

― 小学４年「言葉をつないで読み深めよう！『ごんぎつね』の世界」の実践から ―

１　単元のねらい

心情・行動・情景描写や視点の転換から，主人公の心情の変化を読み取ったり，その表現の巧みさに気付き，読む楽しさを味わったりすることができる。

２　授業の構想

⑴ 子どものとらえについて

子どもたちは，物語づくりを目的とした物語作品（あまんきみこの『車のいろは空のいろ』シリーズ）の読み取りを行った。以下は，授業後のふりかえりである。

> 松井さんはいたずら好きだけど，やさしいなと思いました。理由は，ちょうちょをにがしてしまって放っておくかなと思ったら，大切な夏みかんを白いぼうしに入れてあげていたからです。だけど，ちょうちょをにがしてしまった時に笑った感じの時は，いたずら好きだなーと思いました。（児童Ａ）
>
> 今日は「よかったね。」「よかったよ。」の声について考えました。ぼくは，ちょうど松井さんの心の声だと思いました。わけは，ふつうちょうはしゃべらないけどぼうしの中から助けてくれた松井さんには聞こえるのだと思いました。それに，ここには松井さんとちょうしかいないから松井さんにしか聞こえない心の声だと思いました。（児童Ｂ）

このふりかえりから，児童Ａは，登場人物の行動からその人物像をとらえていることが分かる。主人公の松井さんの人物像をやさしいけれどいたずら好きな親しみのあるキャラクターとしてとらえているが，授業での学級全体の話し合いが，人物像を一面的ではなく多面的にとらえるきっかけとなった。児童Ｂは，物語の終末の場面を，人物像とこれまでの物語の展開，その場面の様子をもとに，想像しながら読んでいることが分かる。こうした読みを自分の物語づくりにいかすことができた。

次に示しているのは，物語教材「一つの花」の授業後のふりかえりである。

> 今日なっとくしたことは，お母さんは，本当はお父さんにゆみ子の泣き顔を見せたくなくて，だからおにぎりをあげたり，「ばんざあい」と言ったりしたという〇〇さんの意見です。（児童Ｃ）
>
> ３場面のお母さんの気持ちで一番大きいと思ったのは，お父さんにゆみ子の悲しい顔を見せたくないということだと思いました。だから「ちょうだい」と言われたらおにぎりをすぐにあげたのだと思いました。３場面では，じょうきょう，会話，人物の行動から気持ちが分かりました。でも，会話に書いてある通りの気持ちではなくて，本当はちがう気持ちだと言うことも分かりました。（児童Ｄ）

場面の状況，登場人物の会話や行動から，心情を読み取っていることが分かる。特に，登場人物の行動描写や会話文には，心情を読み取る手がかりがあると感じ，そうした叙述に着目して読み進めることができるようになってきている。児童Ｃは，戦争に向かうお父さんを見送る場面でのお母さんの心情を，「がんばってきて」など励ます気持ちでしかとらえていなかったが，他者の意見を取り入れながら，場面の状況を踏まえ，お母さんの言動の裏にある心情を読み取ることができた。このような力を付けてきている子どもたちの実態から，登場人物の行動の変化から心情の変化を読み取ったり，場面と場面のつながりを考えて心情をとらえたりする力を付けて欲しいと考えた。

⑵ 本単元の内容と国語科で考える思考力・判断力・表現力の育成との関わりについて

本学校園国語科では，特に「読むこと」の学習を通してものの見方や考え方を広げ，深めながら，「個の読み」を確立していくことを目指している。この「個の読み」は，表現を伴う学び合いの場で，

思考力・判断力・表現力を育て，初読の「読み」を他の学習者の「読み」と照らし合わせながら更新していくことによって確立されると考えている。そこで本単元では，上記の児童の読みの実態を踏まえ，行動・情景描写や視点の転換，主人公と対になる人物との関係から，主人公の心情の変化を読み取る力を付けることをねらった。また，表現の巧みさに気付いて，読む楽しさを味わうこともねらいとしている。教材とする作品は，新美南吉作の「ごんぎつね」である。表現の特徴としては，以下の３点に注目した。一つ目は，会話文や心内語が効果的に使用されていることである。特に心内語は，場面ごとにごんの心情や心理を想像する有効な手掛かりとなるので，人物像や心情の変化がとらえやすい。二つ目は，心情が表れている行動描写や色彩豊かな情景描写が多くありその表現が巧みなことである。これまで，主に行動や会話に着目しながら心情を読み取ってきた子どもは，情景からも心情が読み取れるという新たな発見によって読む楽しさを味わうことができるとともに，より深く心情をとらえられると考えた。また，３場面以降はごんの心情が想像できる行動描写が多いため，そこに着目した読みを展開することで心情の移り変わりをとらえていくことができる。三つ目は，視点の転換が起こることである。１～５場面までは，語り手は主人公であるごんに寄り添っているため，読者は，ごんの行動や心情に共感しながら読み進めていく。６場面のみ兵十の視点で書かれており（一部ねじれはあるが），このとき両者の気持ちが分かる読者は，二人の思いがごんを撃ったことでつながったやるせなさを感じ，この作品から強く訴えてくるものを感じることができる。以上の三つの特徴を踏まえ，本単元では，主人公であるごんの心情の変化を行動描写，情景描写をもとに読み取ること，最終場面の悲劇について考えること，そして，表現の巧みさについて考え，読む楽しさを味わわせることを主眼において授業を展開した。

⑶ 思考力・判断力・表現力の育成に関する学び合う場面の構想について

本単元を展開するに当っては，学んだことを根拠にして自分の言葉で表現する姿を大切にしたいと考えた。そこで本単元では，作品に対する感想を初読後，読み取り後の二度書くことを設定した。物語の終末のとらえは，物語を深く読み進めることで大きく変わる子どももいれば，結論としては変わらないもののその根拠を明確にする子どももいると考えられる。読みの深まりの内容としては，結末部で書かれた内容のみをもって結末をとらえるのではなく，各場面での読み取りにおけるごんの兵十への思いの変化をとらえた上でのものである必要があると考えた。そのため，各場面での読み取りの際に，これまでの学習で獲得した読み方や，新たに身に付けた読み方を自覚しながら使うことができるようにした。また，一つの場面の心情のとらえがその場面での限定的なとらえとならないように，前の場面で読み取ったことをいかしたり，前後の場面との関係をとらえたりしながら心情を読み取っていった。

第１次では，作品「ごんぎつね」と出会う。通読後は初発の感想を書くが，結末について自分の考えを書くことを視点として与える。結末についてどうしてそのように感じたのか，どうしてその結末に至ったのか話し合いを通して探り，みんなで「ごんぎつね」の物語の世界をつくっていくことを確認した。そこで，どのような出来事があり，主人公であるごんの心情がどのように変化していったのかを文章から読み取ることを単元のめあてとして提示した。

第２次では，物語の設定や主人公の人物設定をとらえた後，各場面のごんの心情を叙述をもとに想像しながら読み取っていく。ごんの心情は行動描写を中心に読み取っていくが，結末のとらえ方は兵十との関係をとらえることでより深まると考えるため，心情は兵十への思いに絞って想像することとする。そのため，各場面の読み取りの際には，その場面を象徴するごんの心情を場面のタイトルとして表し，その根拠となる描写を一人読みで見付ける活動を行った。場面の一人読みの後はお互いにタイトルを交流し合う場をもった。ここでは，タイトルに見られるごんの心情のとらえの差やずれが現れると考えられるが，それぞれの読みの根拠となる部分を出し合う中で読みを深めて

いく。それぞれの場面で読み取った心情タイトルは，ごんの心情の変化をとらえる指標となると共に，第２次の最終時では，兵十の心情と対比しながら最終場面を考える材料となると考えた。この心情タイトルはワークシートに残すことで，物語の中のごんの心情を俯瞰できるようにし，一つの場面の読み際にも，前後のつながりを考えてとらえられるようにする。また，加筆・修正できるようにし，読みの変容をとらえられるようにした。

第３次では，これまでの読み取りをもとに，もう一度作品に対する自分の考えをまとめる。初発の感想と同様に，結末についてどのように考えたのかということについては必ず書くこととし，初発の感想からの読みの変容を自覚できるようにする。これについても書き終えたものを全体で交流し，他者の考えを取り入れながら更に自分の読みを深められるようにした。

３　展開計画

次	主な学習	時	具体的な学習・内容（◇印は，学び合い）
1	「ごんぎつね」に出会う。	1 2 3	・「ごんぎつね」に出会い，初発の感想をもつ。 ・初発の感想を交流し，単元のめあてを設定する。 ・１場面の物語の前半部分を読み，物語や主人公の設定を読み取る。
2	主人公の心情の変化を，場面ごとに読み取る。	4 5 6 7 8 9～10 11	・１場面の後半部分を読み，いたずらをするごんの心情を読み取る。 ・２場面を読み，葬式の日の様子やいたずらをしたことに後悔するごんの心情を読み取る。 ・３～６場面の心情タイトルを付ける。 ◇３場面を読み，兵十への償いの気持ちをふくらませるごんの心情を行動描写をもとに読み取る。 ・４場面と５場面を読み，自分の気持ちが兵十に伝わったらと期待するごんの心情を読み取る。 ・６場面を読み，ごんの兵十への思い，兵十の思いを読み取る。 ◇ごんの心情の変化，兵十の最後の場面の心情から最後の場面について自分の考えをまとめ交流する。
3	作品の読みを通じて何を強く感じたのか自分の考えをまとめ，考えを交流する。	12 13	・「ごんぎつね」について再度感想を書き，作品に対する自分の考えをまとめる。 ・全体で考えを交流し，単元のまとめとする。

４　授業の実際

(1) より効果的な学び合いをつくるために

① 単元のめあての設定

第１次では，まず，絵本「ごんぎつね」で読み聞かせを行い，その後初発の感想を書いた。その際，ごんはどんなきつねだと感じたのか，また，物語の結末についてどう感じたのか，という二つの視点を与え，次の時間には感想を交流する時間を設定した。一つ目の視点については，もともと優しいのか，物語の中で優しいきつねに変わったのかということが話題になった。いたずらをしてしまうごんをどうとらえているのかが，それぞれ異なっていたためである。こうして全体として優しいきつねととらえる一方，感想を交流したり，１場面の物語の設定を読んだりする中で異なるとらえも生まれてきた。いたずらばかりするごんを，ひとりぼっちだからさみしいのではないか，村の人に関わったらいたずらをするのではないのか，というとらえも生まれてきた。このとらえが，この後の読みに大きく影響してくることになる。

二つ目の視点である物語の結末のとらえについて，子どもは結末について考える際に，ごんと兵十のどちらが悪いのかといったように道徳的に考える傾向があることが分かった。大半の子どもがこのように結末をとらえている。一方で，登場人物の心情に寄り添って考え，結末にはどんな意味があるのかを考えられたのは13%であった。結末についての読みの実態は**図１**の通りである。

ごんが悪い・・・・・・・・・・・・・・・・・６％
悲しい結末・・・・・・・・・・・・・・・・・24%
兵十が悪い・・・・・・・・・・・・・・・・・13%
どっちもどっち・・・・・・・・・・・・・・・44%
兵十は後悔している・・・・・・・・・・・・３％
ごんの気持ちは届いた・うれしかった・・・10%

図１：初読後の終末についての読みの実態

しかし，このような少数派の意見によって，異なるとらえをしていた子どもからは「ごんは最後，どんな気持ちだったのだろうか」という問いが生まれた。こうした問いが，一つ目の視点の問いを含め，ごんの兵十に対する思いがどのように変わったのか知りたいという動機付けとなり，ごんの兵十への思いを深く読もうという単元のめあてが設定された。

② 個の読みをつくる

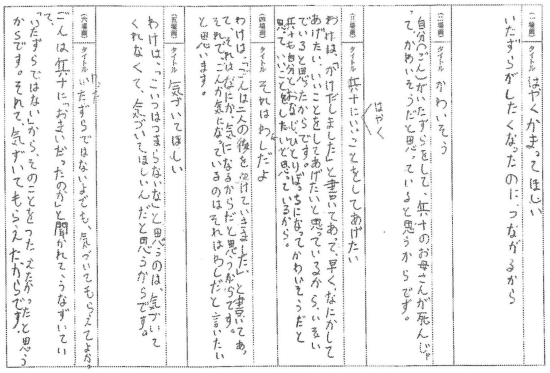

図２：各場面の心情タイトルのワークシート

第３場面以降のごんの兵十への思いについて，個の読みをもつ時間を設定した。子どもはそれぞれ，これまでに単元や，１・２場面で獲得してきた読み取り方（詳細については後述）や１・２場面で読み取ったことをもとに，それぞれの場面を象徴するごんの兵十への心情をタイトルに表し，その理由をワークシートに記述した。このように，タイトルをつくる活動を仕組むことで学習課題を焦点化し，自分の考えの根拠をはっきりとさせることができた。そして，学級全体での学び合いの際には，それぞれが根拠をもとにそれぞれの考え（理由）を交流することができ，個の読みを深めることにつながった。このワークシートは，物語中のごんの心情の変化を俯瞰できるような形式にした。さらに，これから展開される学級全体での学び合いを通して，自分の考えが変わったり深まったりした際に，その変容が分かるようにその都度加筆・修正できるようにした。こうして，最終的には**図２**にあるようなワークシートが完成し，第３次の作品に対する自分の考えをまとめる材料とすることができた。

(2) 全体の学び合いの中で個々の読みを深める

① 学びをいかして読みをつくる

本単元では，学びをいかしながら，個々の読みの深まりをねらっていた。ここでいう学びというのは，読み取ったことや読み取り方である。本単元では，読み取り方を自覚できるように，子どもと共に，文章中の何を手掛かりにごんの心情を読み取っていったらよいのか確認しながら学習を進めた。最初は前単元の学びをいかして登場人物の行動や様子，会話文が主だったが，本教材の特徴である心の中の言葉（心内語）や状況（場面と場面のつながりで考える）などが加わっていく形で，読み取り方を自覚しながら学習を進めていった。

以下は，第５時の授業記録の一部である。

児童Ｅ：「兵十どうしたの，ごめん。」というタイトルにしました。理由は心の中の言葉で「ちょっ，あんないたずらしなけりゃよかった。」と書いてあるからです。
児童Ｆ：同じ所で，めいわくをかけちゃったという気持ちがあるんだと思います。
児童Ｇ：似たタイトルだけど理由が違って，三場面で分かるんだけど，兵十がひとりぼっちになってしまったからこう思ったんじゃないかなと思います。
Ｔ　１：ごんの行動に注目した人もいたね。
児童Ｈ：「悪いことをしてしまった」で，理由は，「ごんはそう思いながら頭ひっこめました。」「そのばん，ごんは穴の中で考えました。」と書いてあるから反省していると思ったからです。
児童Ｉ：私も反省していると思って，前の場面でいたずらしたときは自分のせいだと思っていなかったけれど，ここでは自分のせいだと思って反省していると思います。
児童Ｊ：私も似ていて，３場面のごんの行動から考えると，ここでは悪かったなという思いをもっていると思います。
児童Ｋ：ぼくは同じ３場面のごんの行動から考えたんだけど，兵十に色々な物を持って行ってあげているから，この場面のタイトルを「何かしてあげられるかも」にしました。
Ｔ　２：Ｌさんは少しちがうところを手掛かりにしていたね。
児童Ｌ：ぼくは，「だいじょうぶか，兵十」にしました。「いつもは赤いさつまいもみたいな元気のいい顔が，今日はなんだかしおれていました。」と書いてあって，兵十の顔が悲しそうだったからです。
児童Ｍ：だから，ごんが兵十のことを心配してるんだと思います。

２場面は，ごんの心情を想像する上で手掛かりとなる叙述が多くある。そのため，子どもは児童Ｅや児童Ｈ，児童Ｌの発言に見られるような,心情を想像するために有効な読み方をここで自覚することができた。そして，この後の場面の読み取りにも使ってみたいという思いをもつことができた。また，児童Ｇ，児童Ｉ，児童Ｊ，児童Ｋの発言に見られるように，個の読みや全体での読みで読み取ったことをいかしながら心情を想像しようとする姿もこの場面から見られるようになった。

② 学び合いの実際（第７時の授業の様子から）

第２次では，各場面のごんの兵十への思いを探っていった。第７時では，３場面のごんの兵十への思いについて考えた。３場面は，ごんが兵十への思いを行動に移し始める場面である。１場面までの物語設定，２場面での大きな出来事とそれに伴うごんの心情の変化等の２場面とのつながりだけでなく，物語の設定や，４場面以降のごんの心情をつなげて考え，物語全体の中での３場面の位置付けを考える所まで見方･考え方を高めたかった。そこで，これまでの学習の足跡である掲示物，そして，６場面まで通して付けた心情タイトルを書いたワークシートを考えの拠り所として話し合いを行った。以下は，第７時の授業記録の一部である。

児童Ｎ：「兵十これからは助ける」というタイトルにしました。理由は，自分がいたずらをしたせいで，兵十のおっかあにうなぎを食べさせることができなかったから。
Ｔ　１：助けたいという気持ちが表れているのだね。他にも助けたいと思っている人います？
児童Ｏ：「兵十に早くいいことをしたい」というタイトルです。自分と一緒のひとりぼっちだったし，いわし屋の声がしたときにかけ出したとかいてあるから，早く何かしたいと思ったと思います。
Ｔ　２：どこに書いてあるか分かりますか。みんな分かる。探してみてごらん。文章の細かいところまで見ていますね。
Ｔ　３：助けたいという気持ちが文章を見ていくと分かる所が他にありますか。
児童Ｐ：同じ所で，おれと同じひとりぼっちの兵十かと書いてある所で，自分もひとりで同じだから助けたいと思ったと思います。
Ｔ　４：ここに注目した人いる？
児童Ｉ：「兵十のために何かしよう」だと思って，わけはおれと同じだからできることはないかなと思って，２場面でごめんとか大丈夫とか思っているからいわしを投げ込んだんじゃないかな。
児童Ｑ：「ぼくはかわいそうだな兵十」で，独りぼっちの兵十を見て，かわいそうだなと思ったから持っていった。
児童Ｒ：ぼくも「かわいそう」があると思って，前に，（１場面の掲示を見ながら）ひとりぼっちでさびしいという気持ちがごんにもあったから，兵十も独りで気持ちが分かるんじゃないかと思います。
Ｔ　５：確かにあったね，（掲示物を指して）１場面で，さみしい気持ちとかさみしいからいたずらしたとか。気持ちが分かってかわいそうと思ったの？
児童Ｍ：ぼくも，兵十が自分だったらと考えて，ひとりぼっちのごんも兵十も一緒だから兵十のことがわかるよ。

（中略）

児童Ｓ：「兵十気付いてくれないかな」で，いわしやくりや松たけをあげていて，これで気付いて欲しい，仲良くしたいという気持ちがあるんじゃないかなと思います。
Ｔ　６：気付いてくれるかなという気持ちがあるの？今までと違うね。
児童Ｔ：私もその気持ちがあるんじゃないかなと思って，最初の感想を言い合ったときに，６場面では，兵十に分かってもらってうれしいというのがあったから，気付いてくれるかなという気持ちもあると思って。
児童Ｍ：１場面にあった村の人にかまって欲しいのと同じ，自分も兵十も独りだから，同じ立場になっているから分かる。
児童Ｕ：わー，１場面から６場面までいった。
Ｔ　７：気持ちがつながっているから１～６場面までつながったね。

児童Ｎの発言までは，ごんが２場面で兵十がおっかあのためにとっていたうなぎをとってしまったことの後悔と３場面で兵十にくりや松たけを持って行っている行動を結び付けて，償いとしてとらえている意見が多かった。ところが児童Ｐの発言から，「おれと同じひとりぼっちの兵十か」というごんの心内語に注目する意見が出始めた。そこで，Ｔ３からＴ５のように，同じ所に注目している子どもの理由を引き出すはたらきかけを行った。そうすることで，子どもはお互いの言葉をつなぎながら，同じ境遇になってしまった兵十に対する同情だととらえる考え方の根拠を明らかにし

ていった。そして児童Ｊの発言にあるように，その思いを３場面からだけでなく，１場面で確認したごんの人物設定や心情と関係付けながら想像するなど，場面と場面をつないで考える姿が見られた。児童Ｓは,同じ境遇になってしまった兵十に対して親しみの思いをもっているととらえている。これまでの考え方とは違う視点だったので，本当にそのような気持ちがあるのか全体に問い返したところ，児童Ｔは，６場面のごんの心情とつないで考え説明することができた。それを聞いていた児童Ｕは，ごんの心情をとらえる際には，場面と場面をつないで考えることができるということを確認できたのではないかと考える。学び合いの中で，読み取り方，つまり根拠とする叙述に広がりが出てきたことに加え，これまで読み取ってきたことをいかしながら３場面の心情をとらえることができるなど，個々の読みが深まってきていることが分かる。

４　成果と課題

次の二つの感想は児童Ｖの初発の感想と，単元の最後に書いた感想である。

（初発の感想の一部）

物語の結末は，とりかえしのつかないことになってしまいました。兵十がごんをうってしまうのは，気持ちは分かります。ゆいいつの家族の最後の願いをかなえられなかったのはごんのせいだからです。でも〇〇さんの言った通り殺したのはやりすぎだと思います。でも，兵十はちゃんとごんに言うべきことを言っているし，その点はごかいがとけてよかった思います。

（第12時で書いた感想の一部）

結末については，私は，ごんの視点から考えます。ごんにとってこのような結末は嬉しくもあり，悲しくもあると思いました。嬉しい気持ちは，兵十がごんがやってると気付いてくれたことです。とても気付いてほしいと５場面でごんは思っていました。やっと気付いてくれて，とても嬉しかったと思います。あと，兵十がごんに対してごめんやありがとうと思ってくれたことも嬉しかったと思います。５場面で引き合わないなという思いをもっていたのに,やっぱり持ってきたごんは，持っていくその日その日に親近感をもったんだと思います。だからとても嬉しかったんだと思います。悲しい気持ちは，もっとうなぎのつぐないをしたかったんだと思います。まだ，とちゅうなのにつぐないが出来なくなって悲しかったんだと思いました。でもそのかたわらに，自分が死ぬことでつぐないが出来たとも思っていると思います。あと，親近感をもっていた兵十ともう会えないこともさみしいんだと思います。　（児童Ｖ）

この子どもの変容に見られるように，結末を道徳的にとらえていたものが，主人公のごんの心情に寄り添い，ごんにとっての結末について自分の考えをまとめることができるようになったことは成果であると考える。また，結末の場面の心情とそれ以前の場面の心情をつなぎながら読むことができるようになったことも成果である。全体の８割の子どもに，同じような変容が見られ，その多くはごんと兵十の心情の両面から結末について述べていた。こうした成果の要因は，子ども一人一人が読み取り方を自覚しながら学習を進めていったことがあげられる。ごんの心情はどうやって見付けていったらよいのかその手がかり（読み取り方）を，これまで獲得してきたものに加え，「ごんぎつね」の中でも新しく獲得していき，これを使ったら読める，次はこれを使って読んでみたいという思いをもてたことが読みの深まりにつながったのではないかと考える。また，場面ごとに順番に読み深めるのではなく，まず全ての場面について個の読みをもち，その後全体で各場面について考える展開にしたことで,場面と場面のつながりを意識しながら心情をとらえることができるようになったと考えており，こうした読みは，今後も取り入れていきたい。

しかし，心情タイトルの扱いについては課題が残る。子どもが，タイトルをもとに学び合いを進めることができたが，そのタイトルを付けることの意味や，タイトルを付けたいという必要感が子どもの中にあったかということに疑問が残る。子どもの読みの深まりにより効果的にはたらくように，タイトルのいかし方を考えていきたい。　（文責　恩田　一穂）